

おおほといせき

大保戸遺跡

(相模原市No.287 遺跡)

調査期間 20080501～20091231

所在地 相模原市緑区小倉

時代
旧石器
縄文
弥生
奈良・平安
近世



作成日:20100427 更新:20120427

概要

大保戸遺跡の調査は、一般国道 468 号線(さがみ縦貫道路)建設事業に伴う相模原市緑区小倉の埋蔵文化財発掘調査として 2008 年5月から実施しました。発掘作業は終了し、現在は出土品等整理作業を行っています。遺跡は相模川の上流部、串川との合流地点付近右岸の河岸段丘上に位置し、現地表面の標高は約 165～170mを測ります。本遺跡東側の一段低位の段丘面上には小保戸遺跡、串川を挟んだ対岸には津久井城跡(馬込地区)が位置しています。調査範囲は全体で約 12,600 m²を測ります。これまでの調査で近世、奈良・平安時代、弥生時代、縄文時代、旧石器時代と幅広い時代の遺構と遺物が確認されました。

縄文時代では落とし穴が約 200 基見つかっていますが、弥生時代の落とし穴と考えられる遺構も数基見つかっています。縄文時代の落とし穴は平面形態が円形・楕円形・方形・長方形等様々な形がみられます。また、落とし穴の底には坑底(こうてい)ピットと呼ばれる穴があります。これは、先のがった杭や逆茂木(さかもぎ)を立てるために掘られた穴と考えられています。

一方、弥生時代の落とし穴と考えられる遺構は、平面形は不整形ですが、底は縄文時代の落とし穴と比べて、角がきつちりとした長方形を呈しています。坑底ピットはほられていないようです。形だけでなく、埋まっている土を観察することで



▲ 縄文時代の落とし穴



▲ 弥生時代の落とし穴

も弥生時代の落とし穴と捉えられることが分かります。大保戸遺跡では、写真にあるような黄色いスコリア質の土を弥生時代の土層と考えています。その土がこの遺構に入っていることやこの遺構がその黄色い土の層から掘り込まれているということを総合すると、弥生時代の遺構である可能性が高いということが分かります。



▲ 弥生時代の落とし穴断面